劇の背景〔二〕

山崎紫紅

『破戒會我』は、市川左圍次氏にあてゝ書下した私の戯曲である。

背景の美しいのを以て、その當時都門に劇稱されてゐた。明治座は、私の豫期以上の、めざましいものを、舞臺に顯はした。筆者は同じく『歌舞伎物語』の畫家であつた。

美はしかつた、あまりに美はしかつた。役者は畫の中に沒入してしまつた。而して脚本までも……

坪内先生は、此次に同座に演ぜられた拙作の『底倉湯』を評せられる時に、引例として、箱根の道具のあまりに華麗なりし爲めに、優人を沒却して、しまつたと云はれた。私はいまに、拙作を飾るために、費用を惜まなかつた明治座の厚意を嬉しく思つてゐる、一番目二番目合せて、十數場の大道具の製作の費用は、箱根一場のそれに比して、遙かに下つてゐたとかいふ。しかし、この背景が、私の作の舞臺上の効果を、どれほど助けたかは、今に於て疑問の一である。

此次に演じた『底倉湯』は、長谷川の手でこしらへた。費用もずつと下つてゐるが、この淡い色の調子は、背景の前に、役者を活かして見せた。

丸山晩霞氏が、本郷座の高田河合劇の背景を書かれたことがあつたが、あの時も、やはり色が强過ぎて、役者を蹴つてしまつた。

私はこの經驗で、背景の色の强いのは惡いといふ斷案を得た。したが絶體的に、强い色は惡いと云はれない、登場する優人の衣裳、また脚本の種類によつて、强い色彩を使つても差支へのない場合はあると思ふ。前者は衣裳に單色を使用することの多い洋劇、またはそういふ風に示定してゐるもの、後者はオペラの類を演ずるとき。

これからの私の芝居には、背景について、あまり飛離れた試みもなかつた。明治座で洋畫家が試みた圏内か

ら、脱出するやうなことはなかつた。ひとり私の芝居のみでない、世間の悉くの芝居に於て……

その後私は高田實氏の爲めに『孔明』を書いた。この時に、私は暗い背景を注文した、極めてあらい書き方、そして極めて明るい色に貧しい書き方、それから出る役者の衣裳については、出來得るだけ單色を擇ませた。衣裳と背景との調和、私の考への一端はこの時に、舞臺に顯はれた。たとへその脚本は等級の下つたものにもせい、その衣裳は古實に縛られない北齋筆の『漢楚軍談』的のものにもせよ、私はあの小さな試みに、成功したと今に思つてゐる。

昨年になつて、帝國劇場の開場式に『賴朝』を演じたときに、序幕に大きな楠を使つたが、やゝ世人の目を引いたが、しかしさう大した事でもなつかた。あの後になつても、あの設備の整つてゐる芝居で、あれ以上の事もない、背景の進歩といふ事はむづかしいものであると見える。

私のこの小さな話も、題が大きくなつたので、書くのに肩が張る。この話を書く動機は、大下藤次郎氏が私に描いて下すつた『明智光秀』の背景畫の說明を書けと云はれたのに起因する。

本號に挿んだ下畫は、故人が『史劇十二曲』中の『明智光秀』の夜の幕の用にと、書かれたものである。

大下氏も、劇の背景のことには、興味を持つてゐられた、私は氏の畫室に於て、色々な事を話した記憶を、幻のやうに想起する。

淡い色彩といふ事は、故人と私とが一致した背景についての、第一條件であつた、私は私の苦い經驗から。故人は故人の學ばれた畫の力から。

故人は折があつたら、背景を書いて見たい、研究所の生徒を賴んで、そして研究にやつて見たい、畫具の代さへ拂ふのなら、辨當を持つてでもいゝから出かけるなんて云つてゐた。『明智』は都合によると、上場するかも知れないといふ私の話の下から、故人はあの畫を書いてくれた、事がもし運んだなら、故人は本物をも書いて下すつたかも知れない、參考に背景の誂へ書きを、寫して見ませう。

「柳老ひたる桂河の磧、草生ひたる小丘の下には、水色の旗一と流れ、桔梗つきたる幕を張りて、暮れの風に煙一筋には立ちやらぬ、篝火がはりの焚火、ちよろちよろと燃ゆ、」

こういふ簡易な誂へである。故人はこれを描くのに、私の拙ない脚本を、幾度も讀直したといふ、これでなくてはならぬ、脚本を讀んでかゝる背景畫家が欲しい、今の所、讀んでかゝる人は少ない、いや讀ませて書かせる興行主が、ないのである。これが背景畫家の煩ひだ。

（完）

忠實と不忠實の寫生

戸張孤雁

暑中休暇の時期、山間に海濱に其他思ひ〳〵の所に避暑する讀者も必ず多い事と思ふ、夫して日々の日課の内には寫生なぞ試る人もあらうと思はれる。で私は割合に考へる暇のある此の休暇期を幸ひ、少しく諸士に考へてもらひ度いのである、夫は忠實と不忠實の寫生と云ふ事夫である。

近來眞面目の寫生とか、不眞面目の寫生とか、忠實とか、不忠實とかいふ言葉を人がよく用ゐるやうであるが、然し不幸にして夫が私の考へて居るのと大分相違してゐるやうである。世人の多くが云ふ忠實と云ふのは、目に映ずる物夫れ丈を寸分相違なきやうに寫生する事で、あだかも無神經の鏡面に映ると少しも違はぬ夫で、夫れ以外は如何に忠實に寫生しても不忠實と云ふ内に打込み、情緒なぞの寫生は全く顧られないのである。今私が諸士の一考を希望するのは即ち此の點である。

稻穗を渡る風も、只徒な人には何の事もなく只稻穗を渡る風、夫れ丈に過ぎない。然し自己の内容の豐富の人々には、とうてい斯く單純視丈では濟されべきものではない。夫所に種々なる自己、人間に近き情緒を見出すであらう。解し易く例せば森の綠葉も或る人には只單に青い丈のみに感ぜらるゝ物ではなくて、太陽の光線にある赤も、青も、黃も其他樣々の色彩が其所に見得らるゝであらう。私の忠實とか眞面目とか云ふ